

小学校体育授業におけるリズムを用いた運動プログラムの

有効性に関する研究

—低学年児童の投能力の高まりに着目して—

内山 忠則 (福岡教育大学大学院)

【目的】

本研究では、小学校低学年を対象に、ゲーム領域(ア ボールゲーム)において、リズムを取り入れた教材を用いて運動学習を行い、児童の投能力向上が図れる学習プログラムを考案し体育授業で実践し、その有効性を明らかにした。さらに、考案した学習プログラムがどの教員でも実施できるか検討するために、同じ授業内容を異なる教員が実践し、結果を比較することとした。

【対象及び時期】

M 市立 J 小学校第 2 学年 1 組の児童 29 名及び 2 組の児童 31 名を対象とした。平成 28 年 11 月から 12 月にかけて 6 時間の授業実践期間中に欠席、見学した児童、また調査項目に不回答のあった児童 2 名を除外した 1 組の児童 28 名(男子 13 名、女子 15 名)及び 2 組の児童 30 名(男子 15 名、女子 15 名)、計 58 名を分析の対象とした。また、単元前と単元後にソフトボール投げ測定と的当て測定、運動有能感測定をそれぞれ行った。授業は、1 組の授業を体育専門とする大学研究者が、2 組の授業を体育専門としない教職 2 年目のクラス担任が担当し、2 つのクラスの授業内容は、同じ授業内容で構成した。

【授業内容】

本研究においては、段階的に且つ毎時間の授業で系統性を図った単元を作成した。授業内容として、リズムを用いたステップ習得のための段階的な運動学習や児童が学習したステップを用いて繰り返し思いきり投げたり狙ったりすることができるように「なだれ起こし」や「的当て」、キャッチすることに恐怖を感じる児童であっても安心して取り組むことができるように「手のひらドッジボール」を実施した。

【分析結果及び考察】

単元前後の「ソフトボール投げ測定」と「的当て測定」、
「運動有能感測定」の結果と考察は以下の通りである。

「ソフトボール投げ測定」では、両クラスの単元前後で全体・男女児童ともに平均値が増加し、有意な差が認められた。以上の結果から、いずれのクラスにおいても遠投力を高めることができ、実施した学習プログラムは児童のソフトボール投げの距離を高めることに繋がったと言える。両クラスの上位群下位群の単元前後で比較すると、それぞ

れのクラスの群の平均値は増加した。有意な高まりが見られなかったのは 2 組の上位群のみであった。2 組の上位群が有意な差が認められなかった理由として、単元前の平均値が福岡県の平成 28 年度の小学校 2 年生の男女のソフトボール投げの平均値(福岡教育委員会、2017)よりも高く、更なる数値を伸ばすのに難しい状況であったと推察する。

「的当て測定」では、両クラスの全体の平均値が増加し、2 組においてのみ有意な差が認められた。このことから実践された授業内容は 2 組の正確投を高めることができたと言える。しかし、5 点満点中 1 点台と低い結果であった。今後、的に対して“あてる”でなくて“打ち抜く”ことができるような教材や授業の工夫がより必要であることが課題として挙げられた。

「運動有能感測定」では、1 組での「身体的有能さの認知」・「統制感」、2 組での「受容感」以外で有意な差が認められた。以上の結果から、実践された授業内容は、両クラスともに「運動有能感」を高めることができたと言える。

「運動有能感」を構成する因子の高まりには、両クラス間で違いが見られた。両クラスの上位群下位群の単元前後で比較すると、それぞれのクラスの群の平均値は増加した。有意な高まりが見られたのは、両クラスの下位群のみであった。運動への自信が低い児童の自信を高めることができたことは、体育授業を行う上で大変意義深いものであるといえる。

【結論】

両クラスの異なる教員が同等な成果を挙げることができた。考案した学習プログラムは、教員の専門性や力量、経験の差の影響を受けず、児童の遠投力を高めることができ、児童のやればできるという自信や児童の努力すればできる自信を高めていく上で効果的であり、どの教員でも実践可能であることが示唆された。

【参考文献】

福岡県教育委員会(2017)平成 28 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査 調査結果報告書

http://www.kodomotairyoku.pref.fukuoka.lg.jp/files/MasterReportdoc_75_file.pdf(参照日:2018 年 3 月 20 日)。